

一、貞子さんを偲んで

三月十一日（喪失）

入来院重朝



三月十一日朝食時に妻貞子がぼくに云いました。今日は私達の五十六回の結婚記念日よと。そうか五十六年たつたのかと私は思い、貞子に云いました。よし八回を目指そうと。貞子は笑っていました。

昭和三十一年三月十一日、私と貞子は、貞子の叔母菊池ご夫妻のご媒酌により、東京原宿の東郷神社で両家の両親、ごく近い親族そして私の親友一人、貞子の親友一人に囲まれて式を挙げました。貞子と知り合って、半年

もたつていませんでした。私が二十五歳、貞子が二十三歳の春でした。未だ先のことなど全く何の見通しもない大学の学生同士でした。両家の両親がよく承知してくれたものだと、今思います。私は記憶力が弱く、当時どのよう運んだのか、全くと云つていいほど思い出せません。貞子がいれば、即座にあの時はこうだつたのよと教えてくれたでしよう。

私は少年時十三歳、小学校六年生卒業を控えた昭和十九年、紀元節二月十一日の朝、急性左肺結核性助膜炎を発病し、以後右肺に転じ、続いて腹膜炎と続き、十九年夏に耳元で医師であつた父が呼んだ医師との会話で、自分が危篤状態であることを覚つていました。人は生死の境の中でも知覚は働いていることを私は体験したのです。それから私の両親は、いわゆる民間療法を私にためすべく、効くと称する薬草を郷里の鹿児島にも求め、私に施

しました。その具体的な内容はここでは省略ますが、その効果は実に素晴らしい。秋口には

私は回復したのでした。父が黙つて私の瘦せこけた体を自ら浴槽で洗ってくれた手ざわりを今思い出しますと、涙が湧いてきます。こうして私は一命を取り留め、秋色が濃くなつ

た頃京城の冬は寒く、病後には堪えるというところで、私は内地への転地療法が必要との診断で、父の故郷である鹿児島へ一冬越す為に朝鮮を離れました。一冬越し祖母の温顔に別れを告げ、京城の我が家に戻りましたが、丁度連翹（れんぎょう）の黄色の花が一斉に咲き京城の街路は春色一色でした。こうして私の健康は徐々に回復し、私は一人で毎日のよううに釣具を抱え電車に乗り、漢江の川辺へ魚釣りに出かけました。一人で釣り糸を垂れ川の流れの中の浮きを見つめながら何を思つていたのか全く思い出せません。要するに少年

の首途で味わった挫折を私なりに噛み締めていたのです。

二十年夏。さんさんと降る陽光の昼。近所の主人が鉄道の高級技師を務めておられた奥さんの家の蓄電兼用のすてきなラジオから流れてくる玉音放送を聞いていました。

奥さんの顔色から日本は負けたのだなと覚りました。奥さんがこの時こう云つたのです。坊ちゃん、アメリカは原子爆弾を落として無辜の民を平気で何十万も殺す国です。何れこの口惜しさを晴らさなければなりません。坊ちゃん、絶対このことを忘れないでねと。奥さんの目から涙があふれてきました。

十月には確か父の郷里入来にそれぞれ身一つで一家は引揚げてきました。つまり敗戦国の引揚げ者となつたのです。翌年、私は旧制川内中学校一年生として入学を許可されました。つまり同年齢より一学年遅れたのです。

同年夏だったか翌年二十二年夏だったか、今確かではありませんが、昭和天皇が全国行脚の一齣として鹿児島へも来られ、途次川内へ降りられ、川内中学校の校庭の粗末な壇上へあがられました。校庭を埋め尽くした生徒他、近所総勢市民が多数来ていました。

天皇陛下が何とおっしゃつたか全く分かりません。しんと静まり返つた中での玉音でしたが、私の耳には何とも聞き取れませんでした。敗戦に至つたこもごも天皇としての思いをおそらく済まなかつたと国民への贖罪の旅での玉音を私は心の中で聞きました。

私は突然、泪があふれ出し止まりませんでした。天皇が中折れ帽子を振つて壇を降りられ自然解散となり、私も帰途につきましたが、一向にあふれる涙が止まりませんでした。歩きながら駅に向かいましたが、周りを見ると皆は普段通りで歩いていました。何故私に、

深い感動が襲つたのか今も分かりません。ただ泪は止めどなく湧いてくるものだと云うことを体験しました。

敗戦国の現実つまり、一切占領軍の命令に服従するのみということです。その現れは直ちに私の眼前にさらされました。ある日近所の小学校の校庭下の馬場に家中所蔵の刀剣甲冑のたぐいが山と積まれたのです。かくの如く一枚のフレで日本人は一齊に服すのでした。

私は以前にも書きましたが、マッカーサーG H Qの様々な日本国解体の命令の中での具体的体験は直接我が学業に関するいわゆる学制改革でした。旧制の否定です。私は日本国の無能に等しい柔順さに絶望し、二度目の深い挫折を味わいました。以来私の人生は無明のままでした。つまり私は生きるべく生きていたなかつた。人生への目標を失つたのです。

私が無明のままで自儘に或る絵描き志望

の一人の親友と東京で毎日過ごしていた当時、昭和三十年の秋、私は突如下宿を移ろうと思い、学協の紹介で行つた先に、今まさにその下宿を引き払おうとしていた貞子に会つたのです。初対面の挨拶を交わして、貞子は新しい下宿先に移つていったのでしたが、それ以来貞子は、ちよくちよく私の新しい下宿先、貞子にとつては旧下宿に立ち寄ることになつたのです。私は云いたいことを云い、貞子は私の云うことに反対もせず、黙つて笑つていました。

その年の暮れ私は貞子に便箋一冊に私の思いを書き綴り送つていたことを貞子の死後確認しました。貞子の急死により、彼女の生前の身辺、特に必要書類確認のため彼女専用愛用の筆筒等を調査しましたら、深い筐底よりその便箋一冊が見つかったのです。便箋は相当ヨレヨレ色もあせていました。貞子が黙

つて五十七年近く持ち続けていてくれたことを知つて、私は泪があふれてくるのをどうしようもありませんでした。

私は貞子の無償の愛の一鞭によつて私の人生に明かりが灯つたのです。私は天上の神に感謝せざるを得ません。

こうして私の人生は始まりました。そして私の人生は五十六年間であつたと覚つたのです。貞子に救われたことの証である、東郷神社での結婚挙式の古ぼけた写真を一人取りだして見ていると泪があふれて止まりません。

私の愚かさは貞子が亡くなつてから、そのことを覚つたことからでも明らかです。

つまり私の人生はずつと無明ではなかつたのか、私の人生は貞子との五十六年間であつたと私が覚つたことも、実は無明の証ではないのか。私は貞子を失い、私の人生の喪失の思いをぬぐい去ることが出来ません。私は

貞子を思うと涙が湧いて止まらなくなります。

かつて明るい陽光のもとでの天皇の玉姿に打たれて、ただ訳もなく涙があふれた時の涙とどう違うのか、全く私には分かりません。

貞子が亡くなつたのは五月二日午前十一時二十四分でした。前日正午頃、我が家の勝手出入口での転倒による頭部打撲急性硬膜下血腫、脳挫傷との診断で手術も虚しく亡くなりました。実にあつけない出来ごとでした。

私は当日所用があつて小一時間ばかり外出していました。正午過ぎ家に帰つてみると貞子が勝手口石段下でうずくまつているのです。どうしたと声をかけても無言でした。早速救急車を呼び、抱き起こうとする貞子が、トイレに行きたいと二度しつかりした口調で私に申しました。オウ、行こうと抱き起こし救急車乗務員の手を借りながら家のトイレで用を済まし、良かつたナと声をかけ貞

子はうなずきました。

それが最後の貞子との会話になりました。貞子は救急車内で意識がなくなり、病院到着後のCTでの所見で医者は万事休すと申しました。貞子が私のもとから天空に飛び立つたのは、私にとつて實に理不尽なことであつたと思いました。今もそう思っています。私の人生は五月二日正午で終わつたのだと実感しました。

さて、三月十一日夕刻、日本列島背骨に海神の怒りが襲いました。百日を過ぎた現在でもなお全体の喪失がいかばかりかは分かりません。恐らく金錢では測りがたしのことになります。何ゆえ我が列島の東北地区が狙われたのか、これ又實に理不尽極まる事ではないか、と私は思います。思えば我が日本列島の歴史は凡そ三百年も四百年単位で大きな喪失を経験し、しかし新しい日本を創出してき

ました。先の大東亜戦争での我が日本国ひいて私個人の喪失は、思えば大したことでもなかつたのかも知れません。日本国の再生ひいては新生は実に不思議でありますが、恐らく一天万乗の天皇家の存在によるところにあるのではないかと私は信じています。

現在世界は新しい潮流に棹をささんと各国は鎬を削っています。恐らくあと五年すれば世界の覇権はアメリカ一国の手中に收まりきれなくなるのではないかと思われます。

さて人生を喪失した私の勝手な予想を申しますと、日本国は次のように新生するものと確信しています。

(二) 政治・経済問題

「福島第一原発」の事故を神の啓示として米加豪三カ国に最終的「生殺与奪」の権利を握られていることを再認識し「脱原発」に踏み切る。あと二回か三回の衆議院総選挙を経て、マッカーサー憲法を断固として捨て、日本国新憲法を策定し、軍の統帥権、通貨発行権、司法権、この独立国 の基本三要件の完

つたとしても）二国間原子協定の現下のがんじがらめの桎梏から逃れることが出来る、即ちウランを燃料としている限り、我が日本は独立国になれない。プルトニウムが溜まれば溜まる程、そのことは加重する。

全な米国からの回復を果たす。経済は申すまでもなく今回の日本国喪失に（氣を抜けば）

繋がりかねない東日本大震災を契機として復興景気が勃然と起これり我が国の経済の大きな牽引力となる。

入来院貞子さんを偲んで 銚之原 昌



（三）近未来の我が日本国の立ち位置

独立を回復した日本国は、当然核武装する。これは戦争抑止のためのものなので、数百発くらいのレベルの高い核爆弾を十数隻程度の原潜に乗せて太平洋を遊弋させる。自然に日本の発言力は増し、有力な世界平和推進のリーダー国として興望をになうようになる。なお、科学技術の日進月歩に遅れをとることのないよう（特に原子力研究）学制の改革が行われ、世界平和推進のためのリーダーの養成に真剣に取り組むことになる。（終）

私たち夫婦が、入来院夫妻と知り合ったのは、確か二〇〇七年の文化サロンでの出会いでした。私はその年四月に、鹿児島大学を定年退職し民間病院に勤めるようになつていましたが、いさきかフリーになり時間を持て余し気味でした。その私に、家内が文化サロンにはいってみたら、いろんな変わった人に会えるよという誘いに乗つて入会したのでした。

私に強烈な第一印象を与えてくれたのは、坊主頭の毒舌家？重朝氏と、白髪で上品な貞子夫人でした。それから、ほとんど欠かさずに文化サロンに参加する度に、お話を聞く機

会があり特に懇親会にはご主人と焼酎を飲みかわしました。

貞子夫人には、私が医者ということで、ガン治療中のご相談も受けました。ただ、主治

医を大変信頼されており、抗がん剤も中止されむしろ副作用がなくなり、非常に元気になりました。私も、その勇気に驚嘆し、尊敬しております。病は気からと申しますが、医学的な生半可な治療の無力さを身近に感じることができました。

平成二十年五月には、入来町に案内していただき、入来院家の歴史と島津家の関わりを教えていただきました(写真1、2)。とくに、

全然知らなかつた入来文書と朝河貫一氏の業績をはじめて伺い感動しました。一九二〇年代にこの田舎の入来で何年も調査し、英語で書かれた文書を発行された米国の教授だと知り、驚き敬服しました。私の友人で東大教授

をつとめた歴史家の山口隼正君が入来出身で、ご夫婦と懇意で朝河氏の研究会にはいっていらっしゃることもはじめて知りました。本当に奇遇です。

また、平成二十二年八月には、入来での薪能を七年ぶりに開催され、見学に行きました。その時は、大変お元気でガンを患つてていることも忘れさせてくれる思いでした。どこにあのバイタリティがあるのだろうと家内と感歎しておりました。好天に恵まれ、私ども二組の友人夫婦を同行して参加し伝統芸能を味わうことでした。本当に有り難うございました。

その後、何回か文化サロンに参加していくも懇親会のあと二次会にご夫妻と一緒にちょっと飲んで、つきあって下さいました。いつもご主人の放言?をニコニコしながら聞かれており、酔われてふらふらしているのを心配

しながらホテルに帰つて行かれるものでした。本当に元気で夫婦和氣藹々と過ごされていましたので今回の訃報にはびっくりしました。百才まで生きる会を「ご主人が提唱されていましたしきつと「一人とも長生きされるだろうと思つていきました。あとでご主人にお聞きし、不慮の事故で不運が重なったことを知りました。

ご葬儀に出席しましたが、多方面の名士の方々が来ておられ、その交遊の広さにまたびっくりしました。心からご冥福をお祈りいたします。合掌



写真1 貞子さんと
(平成20年5月)



写真2 清色城跡にて(平成20年5月)